

歓待の物語としてイエスの降誕場面を読む

ルカによる福音書 2 章 1 節～20 節の社会科学的聖書解釈

大 宮 有 博

はじめに

「貧困はどこにだってある。イエスは貧しい者たちとその宿命を分かちあうためにこの世に来た。ヨセフとマリアは貧しかったから旅籠から拒まれたんだ。もし彼らが裕福だったら、彼らはきっと喜んで迎え入れられただろう。」(Cardenal 1976=1982:69) ニカラグア・ソレンチナーメの青年農夫は、イエスが馬小屋で生まれたことについてこの様に述べた。

マリアとヨセフはベツレヘムの宿屋や親族から拒否された。だから彼らは馬小屋に泊まった。そして、イエスはその馬小屋で生まれた。ベツレヘムに「彼らのために場所がなかった」(ルカ2:7) のは、このソレンチナーメの農民が言うように彼らが「貧しかった」からかもしれない。あるいは「マリアの妊娠がヨセフのあずかり知らぬことだった」からかもしれない(例えば本田 2006:128-129)。こういう解釈は、クリスマスの説教でも用いられるほど今では一般的になった。

しかし、近年、古代中近東文化学 (Bailey 2008) や考古学的研究 (Chilton 2006) の観点から、マリアとヨセフはベツレヘムで拒否どころか、むしろ歓待されたという反論が出ている。もしこの反論を受け入れるなら、イエスは貧困と拒絶のただ中で生まれ、そのような人々と同化したのだとする解釈も修正されなければならない。本稿はこの様な研究状況を踏まえた研究である。

本稿では、社会人類学的概念（特にヴィクター・ターナーのリミナリティ／コムニタス論）を用いてイエスの降誕場面のメッセージに接近する¹⁾。本稿で明らかにする点は以下の通り。（ルカによる福音書と使徒言行録の著者である）ルカはこの場面で、イエスや羊飼いたちが歓待されたことによって福音がベツレヘムで最初に告げ知らされたことを描く。そしてこのことを通して、あらゆる人々を歓待することによって生まれるコムニタスとしての教会を暗示する。私はこれまでルカがこの様な教会像を使徒言行録において本格的に展開することを明らかにした（大宮 2004）。本稿で私は降誕場面が使徒言行録で展開される宣教の物語の予告編であることを明らかにする。

1. 方法論：ヴィクター・ターナーのリミナリティ／コムニタス論

本稿で用いるヴィクター・ターナーのリミナリティおよびコムニタスという概念をここで要約する。ターナーは主著『儀礼の過程』（1969=1976）において、ファン・ヘネップの通過儀礼に関する理論を社会過程の理論に発展しようと試みた。ファン・ヘネップは、人がある状態や身分から別の状態や身分になるために通過する儀礼が「境界状況以前」（preliminal）→「境界状況」（marginal/liminal）→「境界状況以後」（postliminal）からなる一連の過程であると主張した（Gennep 1909=2012）。ターナーはこの通過儀礼に見られる三段階が社会過程においても生じると考えた。彼は、三段階の中で特に境界状況に着目して、この境界性（liminality）にある人々が「あいまいで不確定な属性」にあることを指摘した。リミナリティに立つ人々があいまいな存在なのは、彼らが人の地位や状態を設定する「分類の網の目」（=社会構造）から抜

1) 「社会科学批評」（social-scientific approaches）は狭義には、人類学の視点や理論をテキストが物語る世界とテキストの背後にある古代世界に適用する研究である。広義には、考古学の発見や古代地中海世界全体の社会史研究の成果も活用するという点で、社会史的研究や文化研究批評と重なっている。「社会科学批評については浅野（2016）を参照。

け出したり、はみ出したりしているからである²⁾。

さらにターナーは、このリミナリティに立つ人々の間で、反・社会構造の共同体であるコムニタス (*communitas*) が生じると主張した。このコムニタスとは、政治的・社会的地位や身分の序列によって作られた社会構造を横断した、仲間意識と平等意識が共有される未組織の共同体である (Turner 1969=1976: 128)。このコムニタスは、人間の全人格と他の人間の全人格とが関わり合うものである。ターナーによるとこのコムニタスは、マルティン・ブーバーが『我と汝』で用いる「共同体」と同じ概念である (Turner 1969=1976:174)。

このコムニタスは社会構造が存在しないところに一時的に生じるものである。このコムニタスは、再び社会構造によって形成される体制社会へ移行する。この様に人間社会は、(社会構造からなる) 体制社会→反体制のコムニタス→体制社会という移行を繰り返す。(Turner 1969=1976:128-130)

この様に繰り返し出現するコムニタスは、「構造」の側に立つ人たち (あるいは『体制側の人間』) にとって危険な無政府状態にしか見えない (Turner 1969=1976:147-148)。この点でターナーのリミナリティに生じるコムニタスは、社会人類学者メアリー・ダグラスの「汚れ」と重なる。彼女によれば、伝統的な分析基準で明白に分類できないものや分類の境界にあるものは、分類そのもの (それは社会秩序も意味している) を壊しかねないので、「穢れ」すなわち禁忌として排除されることを主張した (Douglas 1966=2009)。この点は、イエスの誕生をリミナリティとして考察する際にもう一度触れる。

2) Turner 1969=1976:126. ターナーはこのリミナリティにおける儀礼として、身分昇格の儀礼と身分逆転の儀礼を挙げる。身分昇格の儀式はこれから高い地位に行こうする者が、一時的に卑しめられるものである。また、身分逆転の儀式は、平素は低い地位にある者が地位の高い者に対して権威を執行し、彼らより高い地位の者がその権威に従うものである。ターナーは言及していないが、バビロニアのアキツ祭やラガシュから出土した碑文にみられる神殿奉獻の儀式など古代中近東においてもしばしばみられる (Lohfink 1987=2010:41)。こういった祭儀の例は Günter Kehrer, et. al. ed. “Vor Gott sind alle gleich”: Soziale Gleichheit, soziale Ungleichheit und die Religionen (Düsseldorf: Patmos Verlag, 1983) において Wolfgang Rölling が列挙している。

2. マリアとヨセフの受けた歓待

2.1 κατάλυμα が意味するもの

ケネス・ベイリーは、多くの現代語訳聖書が「宿屋」(an inn) と訳してきた κατάλυμα を³⁾、「客間」(a guest-room) と訳すことで、イエスが誕生した夜、マリアとヨセフはベツレヘムの小作農の家に招かれたと主張した (Bailey 2008:28-33=2010:35-42)。ルカは旅人が寝泊まりする場所として κατάλυμα の他に、πανδοχεῖον とラテン語に由来する ταβέρνη を知っている⁴⁾。πανδοχεῖον は専ら商業的な宿屋を指している。ルカは「善いサマリア人の譬え」で πανδοχεῖον を用いている (10:34)。κατάλυμα はルカ22:11 (マルコ14:14並行) でも、いわゆる「最後の晩餐」が開かれた「二階の広間」を指して用いられる⁵⁾。おそらく、この語は個人の家客間を指している。ベイリーはパレスチナの平均的な家屋の観察から、大きな家なら2階にある広間が、小作農の住む小さな家ならば居間の奥にある部屋が、客間 (κατάλυμα) として使われたと推察する (図1)⁶⁾。今では多くの註解書が κατάλυμα を個人宅の「客間」と訳す立場を

-
- 3) 日本語訳聖書では『口語訳』(1955年)が「客間」としているのに対して『新改訳』『新共同訳』は「宿屋」としている。『フランシスコ会訳』は、分冊(1967年)は「宿屋」と訳しながらも、註に(1)宿屋とする説と(2)客間とする説があることを挙げている。分冊版の改訂新訳(2002年)ではこの説明がなくなった。
- 4) ταβέρνη は「小さい家」「宿」などを指すラテン語の taberna のギリシア語表記である。ルカは ταβέρνη は使28:15に、地名として Τρεῖς Ταβέρνη (ラテン語による地名 Tres Tabernae のギリシア語表記) を挙げている。ルカがラテン語を全く知らなかったとしたら、彼は ταβέρνη を地名としてしか知らないことになる。
- 5) イエスの弟子は κατάλυμα を探し、「席の整えられた二階の広間」(ἀνάγειον μέγα ἐστρωμένον) に案内された (ルカ22:12//マルコ14:14)。
- 6) ベイリーは κατάλυμα の七十人訳聖書 (LXX) でどのように用いられているか検討していない。しかし LXX の検討は彼の説に新たな根拠を加える。この語は ἕνθα や ἰδιῶν など寝泊まりする場所 (野宿する場も含めて) を意味する多くのヘブライ語の訳語として LXX に頻繁に用いられる (少なくとも13回)。そのうち出エ4:24; サム上1:18; 一マカ3:45で κατάλυμα は隊商宿を意味している。その他の箇所では、天幕や客間を指している。このように LXX では κατάλυμα が指すものにかかなりの幅

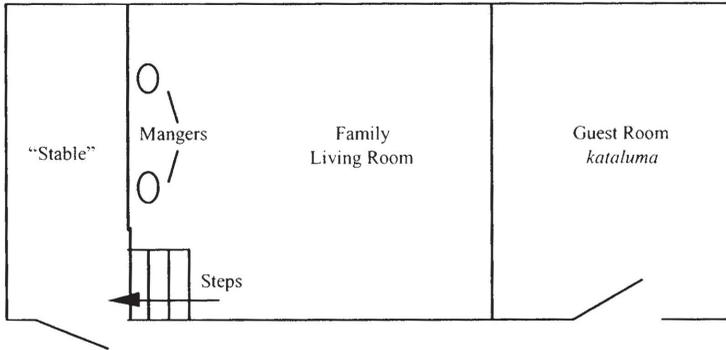


図1 「客間」のあるパレスチナの村の一般的な家の平面図 (Bailey 2008:33)

T取る⁷⁾。

この時代、この地域で旅をする人は、行った先の町や村で親戚や知人を探し出して、その家に泊めてもらった。親族や知人との関係を大切にす文化だったことや歓待の慣習（後述）が定着していたことから、旅人は快く客間に泊めてもらえた。親戚や知人がいない地を訪れたとしても、世渡り上手な人なら、一晩くらい泊めてくれる人を市場で見つけることは容易だったであろう。

それに対して、当時、個人あるいは夫婦で旅をするユダヤ人は宿屋(πανδοχείον)に泊まることを避けたであろう。宿屋はどのような宗教や文化

がある。したがって、ルカが κατάλυμα というギリシア語を用いる時、それが商業的宿屋を限定的に指す言葉として用いているわけではないことが明らかとなる。他方、πανδοχείονは LXX では用いられない。また新約聖書においてもこの語はルカ 10:34 だけに出てくる。このことからルカが、商業的宿屋を意味する言葉として πανδοχείον を福音書の中で用いることによって、「客間」を意味する言葉として κατάλυμα を使い分けたと考えられる。

- 7) 例えば Plummer 1925:54 はかなり早い段階から κατάλυμα を「客間」と訳した。英語圏の註解書の多くはあいまいな lodging という訳語を選ぶ。最近の日本語の註解書では嶺重が κατάλυμα を「客間」と訳す(嶺重 2012:58)。Nolland は「居間には彼(イエス)の場所がなかったから、飼い葉桶に寝かした」と訳す。しかし κατάλυμα が「居間」を指している可能性のある例は少なく、ルカ 22:11 が 2 階の客間を指して用いている。ましてや「彼ら」を「彼」という本文上の根拠もない。これらのことから、筆者はこの Nolland の説を取らない (Nolland 1989-1993:1:106)。

の背景があっても泊まれた。そのため、異邦人と共に食事をするなどとの交流を避けてきたユダヤ人は、宿屋を利用しなかった。また、宿屋は無法者や強盗の巣、買春が行われるいかげわしい場所という風評もユダヤ人の間にあったと考えられる⁸⁾。

これらのことを勘案すると、マリアとヨセフはベツレヘムで知人が親戚の家に泊まろうとしたはずである⁹⁾。しかし、おそらくその家の「客間」には先客がいた。この家の人々は、先客がいたにも関わらず、マリアとヨセフを家に迎え入れて、自分たちが生活する居間にこの夫婦を泊めた。このベイリーの結論に筆者も同意する (Bailey 2008:37=2010:47)。

また、マリアとヨセフはこのベツレヘムの家にかかなり長期に渡って滞在したことになる。なぜなら今も昔も出産直前に旅行はしない。ましてや当時の幹線を離れた街道の劣悪な状態、道中の治安の悪さ、宿泊場所の確保の難しさなどから考えると、マリアとヨセフが出産直前にベツレヘムに旅をしたとは考えられない。6節に「彼らがベツレヘムにいるうちに」とあるが、それは相当長い期間を意味していないと、話に無理がある。さらに言うと、レビ記12章の出産の規定が定める「清めの期間」は男児の場合33日である。したがって彼らは出産後もしばらくその家に留まらなければならなかった。そうするとマリアとヨセフは、イエスの出産をはさんで相当長い期間この家に滞在したことになる。

生まれてきたイエスは、その地方で生まれたばかりの子どもがそうされるように布でくるまれた (エゼ16:4; 知恵7:4-5)。そして居間と小家畜スペースの

- 8) ローマ時代のパレスチナの宿屋に関する史料は少なく、ラビ文献の記述から推測するしかない。『ミシュナ』「アボダ・ザラ」2:1は、宿屋にサマリア人も異邦人も泊まることもあって偶像との接点が生まれることを警戒する。また、『ミドラッシュ・ラバー』(創世記ラバーは5世紀頃に成立)には強盗と結託する宿屋の主人についての言及もある (Gen. R. 92.6=英語訳は H. Freedman tr., *Midrash Rabbah* [London: Soncino, 1983], 2:844)。宿屋については Hezser (2003:213-214) を参照。個人や夫婦の旅人にとって、宿屋に泊まることは様々な危険を覚悟しなければならないことであった。
- 9) エレ41:17はベツレヘムの近くに隊商宿があったことを示すものの、イエスの時代、幹線道路から離れた小都市(村?)であるベツレヘムに宿屋があったとは考えにくい。

間に設けられた飼い葉桶に寝かされた¹⁰⁾。これらは、名前すらわからないベツレヘムの家の人々の最善を尽くした歓待である。

ルカによる福音書と使徒言行録はこの誕生場面から始まって、歓待によって神の国の福音がガリラヤからユダヤ、サマリアそして「地の果て」(使1:8)へと広がっていく大きな物語である。ルカによる福音書でイエスは行く先々で歓待を受けながらエルサレムへと旅をした¹¹⁾。使徒言行録では使徒やパウロも同じ様に歓待を受けながら旅をし、福音を「地の果て」まで伝えた¹²⁾。このイエスの誕生場面は、ベツレヘムのある家による歓待によって幕が開いているのであるから、イエスや使徒たちによる宣教の旅を先取りしていると言える。

2.2 歓待の慣習

この様な旅を可能にしたのが歓待 (**hospitality**) の慣習である。地中海世界に広くこの慣習は見られる。ギリシア・ローマ世界には、旅人は無力であり、それゆえに神の庇護を受けているという考えがあった。またこの世界において旅人歓待は、自分たちが外来者を嫌がる「野蛮な」人々とは違うという自負を表す行為でもあった。

この点をギリシア・ローマの2つの文学作品から確認する。まず、ホメロスの『オデュッセイア』第14歌は、オデュッセウスがようやくアテネに帰って来

-
- 10) 嶺重はイエスが飼い葉桶に寝かされたことが「異常な行為」であり、そのことによって「救い主であるイエスが実に素朴な環境のもとで誕生したという点が強調されている。」(嶺重, 2012:58) しかし、ベイリーによれば、飼い葉桶は、家畜のスペースと家人が暮らすスペースの間に、床石を掘って設けられた (Bailey 2008:28-31=2010:35-39)。このような移動不可能な飼い葉桶が、しばしば赤ん坊のベッドとして使われていた可能性もある。飼い葉桶は確かに心地の良くないし、不衛生に思える。しかし、飼い葉桶に寝かされたことは、異常とまでは言わないが、救い主が貧しい小作農の家の歓待の中でこの世に現れたことを象徴していることは確かである。
- 11) 拒絶の例としてはルカ9:51-54。歓待の例としてルカ11:37; 14:1; 15:1-2; 19:5; 22:11-12。
- 12) 使徒言行録において歓待の例として、使9:43; 10:48; 16:15; 16:34; 15:3; 18:7-11; 18:26-27; 21:4, 8, 16; 27:3; 28:2。

た場面である。アテネに着いたオデュッセウスは襤褸をまとった老人の姿で、彼の忠実な豚飼いエウマイオスの家を訪れた。エウマイオスはその老人が自分のかつての主であるとは気づかないまま、手厚く歓待した。そして歓待の食卓でエウマイオスはオデュッセウスに、「他国から来る人も物乞いも、みなゼウスの遣わされたもの」(14.55)と述べた。すると彼は、目の前にいる人がかつての主オデュッセウスであることに気づいた¹³⁾。この歓待の場面が、その後のギリシア・ローマ文学で異国からの旅人を歓待の物語の原型となった。

次に、オウィディウスの『変身物語』には、人間の姿をしたユピテルとその息子メルクリウス（ギリシア神話ではゼウスとヘルメス）が宿を探していたところ、貧しい老夫婦バウキスとピレモンから歓待を受ける場面がある。この二神は神としての姿を老夫婦に示し、この夫婦の願いをかなえた(8.610-700)。この物語は使14:11-13の背景にある物語なので、ルカはこの物語を知っていたはずである。

旧約聖書にも歓待の物語が見られる。まず、創18章は旧約聖書の歓待の物語の典型である。アブラハムが通りがかりの2人の旅人を歓待する。この2人の旅人は実は御使いであった。御使いはアブラハムと妻サラに男の子の誕生を、そしてアブラハムだけにソドムの滅亡を知らせた。ソドムのロトも彼らを歓待した(創19章)。しかしソドムの人々はこの旅人に乱暴しようとした。その結果、ロトとその家族の命は救われたが、ソドムは滅亡した。

また、士19章は無名の女性が殺されて切り刻まれるという恐ろしい物語であるが、ここには2つの歓待の場面が含まれる。3-10節で、側女の父は、側女を連れて帰ろうとする側女の主人を何日も引き留めて歓待している。おそらく当時の旅人はこの様に手厚く何日ももてなされたのであろう。また、旅をする側女の主人と側女と若い従者は、ギブアの町に入ると町の広場で腰を下ろした(15節)。旅人はこの様にして町の広場で泊めてくれる人を探したのである。幸

13) ジョン・テイラーは、『オデュッセイア』のこの場面がトビト5-7章を通してルカによる福音書のエマオでのイエスの顕現場面(24:13-35)に共鳴していると述べる(Taylor 2007:233-234)。

い一人の老人が彼らを泊めた。16-21節の老人と旅人との間の対話は先述のパウキスとピレモンのお話を思い起こさせる。(凄惨な出来事はこの後に起きる。) これらの旧約聖書の物語はイエスの時代のユダヤ人に、旅人を歓待する者に祝福が与えられ、旅人を拒絶または虐げる者に滅びがあることを教えたはずである。

この様なことから、ローマ時代のパレスチナのみならず地中海世界全体に歓待の慣習が浸透していたと考えられる。この歓待の慣習があったからこそ、マリアとヨセフはベツレヘムで自分たちを泊めてくれる家を見つけられた。またイエスはエルサレムに向かって旅した。そして使徒たちによる宣教は「地の果て」まで広がった。エレ14:8は、救い主が「この地に身を寄せている人」「宿を求める旅人」のようであると述べる。この降誕場面は、この様なイエスの地上での活動を予告している。ルカはこの場面を、匿名の人による歓待でさりげなく彩った。あまりにもさりげなかったので、長い間、このルカの彩色技術は気づかれなかった。

3. リミナリティとしてのイエスの誕生

先にターナーのリミナリティ概念について述べたが、イエスの誕生場面は二重の意味でリミナリティの出来事と言える。第一に、出産という出来事自体がリミナリティの出来事である。リミナリティとは、ある状態や身分から別の状態や身分へと、あるいはある世界から別の世界へと移行する通過点の、あいまいで不確定な属性を意味する。出産という出来事は、子宮の内から外へ、非存在から存在へと移行するリミナリティと言える。確かにターナーは出産や死をリミナリティとして例示している (Turner 1969=1976:127)。

リミナリティは社会構造を危険にさらすという点で、メアリー・ダグラスの言う「汚れ」と重なる (Douglas 1966=2009)。旧約聖書の律法は、出産に伴う出血を祭儀的汚れとする。出産した女性は出産した後一定期間外出することが禁じられ、その期間が完了した時に贖罪の献げものをすることを命じられて

いる（レビ記12章）。ルカもこのことを知っていた（2:22）。ルカも含めて当時の人々にとって、確かに誕生という出来事は喜ばしい出来事なのだが、同時に子宮というカオスを通過して新しい存在がこの世界に現れるということはリミナリティの出来事である。

第二に、イエスの誕生場面は「いと高き方の子」「神の子」と呼ばれる方が人間になったという点でリミナリティであると言える。ルカによる福音書の物語において、いと高きところからこの世界に来て人となったイエスは、死と復活をへて再び天に上げられた。イエスの誕生は、神であった状態から分離され人間となった瞬間である。

ターナーによれば、この様なりミナリティにおいてコムニタスが生まれる。このコムニタスは、イエスの誕生場面では歓待（hospitality）によって生まれた。この場面では、聖書に名前も記されていない村人が、すでに奥の間に別の客を泊めていたのに、このナザレからやって来た夫婦を泊めたことで幕が開くからである。この点は次項で改めて述べる。

4. 羊飼いたちの受けた歓待

さて、場面はベツレヘムの村人の家から、村の外で野宿する羊飼いのもとへと移る。ルカによる福音書はイエスをダビデの子とする¹⁴⁾。ダビデはベツレヘムで生まれ育った（サム上16:1-13など）。そこでルカは、たとえイエスがナザレの出であったとしても、「ダビデの町」ベツレヘムの生まれとしたかった（ルカ2:4, 11）。またルカは自分の持つ旧約聖書の知識から、ダビデがベツレヘム

14) イエスの誕生予告やザカリアの讃歌には、メシアをダビデの血筋に結びつける初期ユダヤ教のメシア思想を反映した言葉が見られる（1:32, 69）。ただしルカにとって「ダビデの子」は多くのイエスの称号の一つであって、それは当時のキリスト教の基本的理解に従ったにすぎない（参照：ロマ1:3；二テモ2:8）。ルカによる福音書での使用は、すべてマルコによる福音書のテキストと並行している（ルカ18:38, 39[マルコ1:47, 48と並行]；20:41, 44[マルコ12:36, 37と並行]）。また使徒言行録には1回しか出てこない（使13:23）。むしろイエスをダビデの子とするのはマタイによる福音書の特徴である。

で羊飼いをしていたことを知っていた（サム上16：11他）。そこでベツレヘム近くの野宿する羊飼いを、「ダビデの子孫」であるイエスの誕生場面に加えた¹⁵⁾。

実際のところ、ベツレヘム周辺で牧畜業（この地方の場合は羊と山羊）が定着していたことは多くの文献が明らかにしている¹⁶⁾。当時の牧畜は、①年間を通した荒野での牧畜、②夏場だけの集住地周辺の牧畜、③農家が2～3匹の小家畜を飼って収入の足しにするという3つのタイプがあったと考えられる（Safrai 2010:257）。①と②のタイプの牧畜は、専門の羊飼いか、あるいは小作農が農閑期の生活の足しにするために行った。その多くは豊かな農家に雇われた¹⁷⁾。さて、誕生場面に登場する羊飼いは明らかに①か②のタイプである。

町に暮らす者—その多くは貧しい小作農、職人、小商店主—は、羊飼いを「ならず者」を見る様に見ていた。農民側の主張によれば、羊飼いは契約を破って、耕作地に羊の群れを入れてしまうことがあったと言う¹⁸⁾。この様なことから農民の間に、羊飼いは不正直で、盗人の様であるという偏見があったのではないだろうか（Hamel 1990:119）。

またヨセフスの証言によると、ヘロデ大王の死後、次王が決定するまでの短い混乱期に（前4年）、羊飼いであるアスロンゲス（『戦記』ではアスロンガイ

-
- 15) ルカが独自にこの場面を描いたのではなく、そういう伝承を選んでここに加えた。
- 16) 気候から考えて、ガリラヤで農業が盛んであったのに対して、乾燥したユダヤでは牧畜が盛んであったことは容易に想像できる。『ミシュナ』『シェカリム』7:4によると、エルサレムとベツレヘムの近くにある「羊の群れを見張る塔」の間で育った家畜が神殿の犠牲に用いられた。こういった記述を旧約聖書の記述とあわせて読んだ時、ユダヤ地方では牧畜が伝統的に盛んだったことがわかる。
- 17) 『ミシュナ』『ベツァ』5:3、「ババ・カンマ」6:2には、羊飼いと羊の所有者の責任の分担などが定められている。他方で、「シェビイス」3:4は羊飼いが羊の所有者としての責任をはたさなければいけないことになっている。こういった法律は、雇われ羊飼いと羊を所有する羊飼いの両方が存在した可能性を示す。
- 18) これは創世記13:7の『タルグム』の断片による（英語訳は Michael Klein, *The Fragment-Targums of the Pentateuch*, Rome: Biblical Institute Press, 2 vols, 1980, 1:132, 2:96）。この『タルグム』断片は、ロトとアブラハムの対立は、家畜に口輪をせずに自由に草を食べさせたことが原因と解釈する。これはユダヤの地でよくあった農家と羊飼いの間の対立を背景にしていると考えられる。

オス)が一団を結集し王位を主張した(『古代誌』17.278-284;『戦記』2.60-64)。彼らはローマ軍を攻撃するだけでなく、次第に金目のものを持つ者ならユダヤ人でも襲うようになり盗賊化した。こうしたことから、1世紀の一般的なパレスチナ・ユダヤ人は、羊飼いを危険な「盗賊」「ならず者」と見ていたと考えられる¹⁹⁾。

さらにラビ文献は羊飼いたちを「汚れた人々」であるかのように描いている²⁰⁾。ラビ文献は、イエスの時代からもルカによる福音書が書かれた時代からも、約150年後の時代に編纂された書物である。したがって、その思想は部分的に1世紀を反映していると思われるものの、イエスが生まれた時代を知る手がかりとして用いるには、かなり慎重にならなければいけない。

ラビ文献を手がかりにして、イエス時代のパレスチナでは羊飼いがユダヤの清浄の法で『汚れ』とされ人から蔑視される職業〔despised trades〕すなわち「賤業」²¹⁾の一つであったと主張したのは、エレミアスである(Jeremias 1962=1969:303-312)。このエレミアスの考えは長い間広く受け入れられてきた。しかし、E. P. サンダースらによる批判を受け(Sanders 1992:461-464)、今はあまり受け入れられていない。確かに『ミシュナ』のラビの中には3-5世

19) ヨセフスによるとこの混乱期に、羊飼いの一団以外にも、兵士や奴隷も反乱を起こした(『古代誌』17.269-277;『戦記』2.55-59)。ヨセフスはこの時代を総括して盗賊(λησθηριον [『古代誌』17:285])・野盗(λησθηρικος [『戦記』2:65])の時代と呼ぶ。こういうレッテルが羊飼いたちに貼られていたことが想像できる。

20) エレミアスが挙げるラビ文献の5つの「汚れた職業」あるいは「賤業」(despised trades)のリストの内少なくとも3つに羊飼いが含まれている(Jeremias 1962=1969:303-312)。そのうちの一つ『ミシュナ』「キッドウシン」4:14では、「盗人の仕事」として、父親が息子に伝えてはならない仕事の一つとして「牧畜夫」が挙げられている。彼らは定住していないことから、直接彼らから羊毛、乳、子羊などを購入することが禁じられている。

21) この despised trades を「卑賤視された職能」と解し、「賤業」と日本語に訳したのは栗林である(1991:235)。栗林はエレミアス説を土台にして、江戸時代の被差別民によって担われた職と福音書に登場する職業が重なり、イエスは日本の差別と闘う民衆のただ中にいるとするキリスト論を展開した。私見では、エレミアス説が覆されたとしても、福音書はイエスを被差別の民衆の解放のシンボルとして描いていると考える。この点については本稿のテーマをやや超えるので、稿を改めて論じる。

紀の小さい畑を耕す農民や商人が含まれる。そのため『ミシュナ』が、この頃の中小規模の町に暮らす人々の視点がある程度代弁しているとは言える。とはいうものの、旧約聖書が羊飼いを「賤業」と見ていないどころか肯定的に描いているのに、ラビ文献の記述だけで、羊飼いを1世紀パレスチナの・ユダヤの「賤業」と断定することには無理がある。

1世紀の羊飼いは貧しい小作農の一種であって、旧約聖書の清浄規定に違反する社会集団の一部とまでは言わない(図2)²²⁾。しかしヨセフスの証言を手がかりにして考えると、野宿する羊飼いは1世紀のパレスチナに暮らす人々から、何をしでかすかわからない危険な「盗賊」「無法者」「厄介者」あるいは「ならず者」²³⁾として偏見の目で見られていたと推察される。そういう意味で羊飼いは、日常生活の中で差別を経験していたはずである²⁴⁾。

ルカによる福音書では、この様な羊飼いが最初に、天使によってイエスの誕生を知らされた。羊飼いたちはベツレヘムに向かって急いで行った。そしてベツレヘムで彼らは、天使が言った通り、布にくるまれて飼い葉桶で寝るイエス

22) 図2はゲルハルト・レンスキによる農村社会における社会階層をグラフ化したイメージである(Lenski 1966:284)。この図を用いてレンスキは、産業技術が発展する前の単純な農村社会における典型的な社会階層間の関係を描こうとする。この図を1世紀のパレスチナ農村社会に援用する時、羊飼いは法や慣習によって疎外された「汚れた」人々(unclean and degraded)ではなく、漁師や大工(石工)などとともに小作農(peasants)のセクターに含まれると考えられる。

23) 「ならず者」は旧約聖書の申13:14や士19:22など20回以上用いられる言葉である。ヘブライ語ではבְּרִיָּא (ベリアル、多くの場合בְּרִיָּאִים) など、ギリシア語(LXX)では υἱοὶ παρανόμων (またはλοιμοίなど) が用いられる。παρανόμοςは「無法者(lowless)」、λοιμόςは「厄介者(plague)」である。申命記・士師記・サムエル記・列王記・歴代誌で、こういう「ならず者」は旅人を襲うような危険人物である。しかしこの「ならず者」は命知らずであったため、彼らは争いの時に権力者などに利用された。羊飼いをこの「ならず者」と呼ぶ文献はないものの、ヨセフスの報告するアスロンゲス率いる羊飼いたちのイメージは、この「ならず者」のイメージと被る。ルカは使17:5でユダヤ人にけしかけられた暴徒を「町をぶらつくならず者」と呼んでいるから、この「ならず者」という旧約聖書の感覚を共有していたと考えられる。

24) このような農民など町で暮らす人々の視点を反映して、2-3世紀のラビたちは羊飼いを「子どもを就かせるべきではない職」すなわち「汚れた職業」のリストに載せたのではないだろうか。

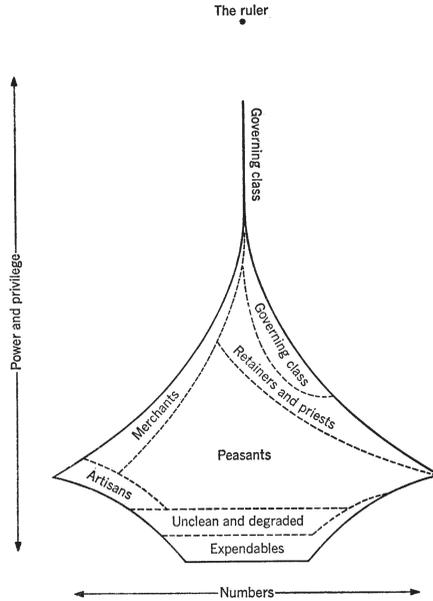


図2 産業化される前の農村社会の社会階層間の関係図 (Lenski 1966:284)

を「探し当て」(ἀνευρίσκω)、その光景を「目撃した」(ὁράω)。その後、この子について天使が彼らに告げたことをベツレヘムの人々に「知らせた」(γνώριζω)。

これがもし現実に起きたことならば、ベツレヘムの町の人々の協力なくして、イエスが生まれた家を羊飼いたちが「探し当てる」ことは出来なかった。羊飼いたちは、その日に生まれた赤ん坊のいる家を町の人々に尋ねてまわったはずである。そしてたまたま尋ねられた人は、「ならず者」と思っていた羊飼いが町に入り、自分に話しかけてきたのだから、さぞ戸惑ったことであろう。しかしベツレヘムの町の人々は誰一人として、羊飼いたちを追い払わなかった。またマリアとヨセフを泊めた家でも、羊飼いたちが家に入ることを認めた。だからこそ羊飼いたちは、天使が彼らに知らせた通りの光景を自分の目で目撃することが出来た。

この様にイエスが誕生した夜、ベツレヘムの町の人々は、これまでの「羊飼いの対・定住農家」という対立関係や偏見をいったん脇において、羊飼いたちが町に入り、家にあがることを認めた。それによってベツレヘムの町の人々は、この羊飼いを通して福音を知ることが出来た（17節）。これから始まるルカ福音書から使徒言行録の大きな福音が「地の果て」に広まっていく大きな物語において、羊飼いたちは最初の福音の語り手（宣教者）であり、ベツレヘムの町の人々は最初の福音の受け手であった。

5. 束の間のコムニタス

この様にイエスが生まれた夜、ベツレヘムはターナーの言うコムニタスになった。ターナーによれば、コムニタスはリミナリティの状況において境界性にある人々の間で生じる（Turner 1969=1976:128など）。ルカによる福音書の降誕場面では、イエスの誕生というリミナリティの状況において、ベツレヘムの町の人々が、旅人と野宿する羊飼いとという境界性に立つ人々を歓待したことによって生じた。まず、ベツレヘムの町のある家は、先客が奥の間にいるのに、ナザレからの旅人の夫婦を自分たちが生活する居間で歓待した。マリアはその居間でイエスを産んだ。次に、天使からイエスの誕生を知らされた羊飼いたちが、（マリアとヨセフを泊めた家も含めて）ベツレヘムの町の人々によって受け入れられた。そして、羊飼いたちは、この町の人々に福音を宣べ伝えた。こうして神の子イエスが人間の世界に誕生するという二重のリミナリティの状況において（本稿3参照）、ベツレヘムの町の人々は歓待によって、日常生活にがっしりと根を下ろす社会構造（羊飼いを偏見によって排除することなど）を打ち破り、コムニタスを構築したのである。

この場面は、使徒言行録で描かれているキリスト教共同体の宣教史を先取りしている。イエスが天に上げられた後、福音はキリスト者たちの手によって、エルサレムからユダヤ、サマリアそして地の果てまで告げ知らされた（使1:8参照）。この福音宣教が拡大していく過程で、ユダヤ人であるキリスト者たち

は、敵対するサマリア人やローマ人に歓迎され、ともに平等な仲間意識を持つ共同体 (= 教会) になった²⁵⁾。この様な共同体は、ユダヤ人の目には一つの布の中に汚れた動物と清い動物が一緒くたになって入っている状態に等しく映った²⁶⁾。しかし、これこそルカが使徒言行録で示した教会の姿であった。この様に見ると、この降誕場面においてルカは、使徒言行録で描こうとしている、あらゆる対立や排除の構造を乗り越えようとする教会が創出されることを予告している。

まとめ

本稿は、ルカによる福音書の降誕場面の基調が（ソレンチナーメの農民が言うような）拒絶ではなく歓待であることを明らかにした。この場面には二重の歓待が含まれている。まず、ベツレヘムの町のある家は旅人であるマリアとヨセフを、奥の客間（κατάλυμα）に先客がいたにも関わらず、自分たちの生活空間である居間に長期に渡って泊めた。二人が貧しさやマリアの妊娠に対する疑いの故に町から拒否され、馬小屋でイエスを出産したということは、ルカの物語から確認することは出来ない。マリアとヨセフがその家に泊めてもらったのは、古代地中海世界に広く浸透していた歓待の慣習があったからである。イエスも使徒たちも、この慣習に助けられて神の国の福音を「世界の果て」に至るまで伝えることが出来た。この降誕場面は、そのことを予告している。

25) サマリア人宣教（使8:4-25）では洗礼の後に、神による信仰の承認としての聖霊の降下が見られる。エチオピアの宦官への宣教（使8:26-40）では、宦官の「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」（8:37）との言葉に促されて、フィリポは洗礼を執行している。また、コルネリウスへの宣教（使10:1-11:18）では、聖霊が洗礼に先行してコルネリウスとその家の者の上に降下した（10:44）。この宣教の後押しによって、ペトロは「わたしたちと同様に聖霊を受けるのを受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」（10:47）と言って、洗礼を授けている。洗礼と聖霊の降下によって教会は様々な人々を包括する共同体への一歩を踏み出した。

26) 使10:9-16のペトロの幻。詳しくは大宮（2004）。

次に、1世紀のパレスチナの農民は、イエスが生まれた夜だけは、羊飼いに對する偏見を脇において、彼らが生まれたばかりのイエスを見に町に入ることを認めた。その結果として、羊飼いは最初の福音の宣教者となり、ベツレヘムの村人は最初の福音の受け手となった。

このことは、人類学者ターナーの言う社会構造に對抗してリミナリティの人々によって形成されるコムニタスがベツレヘムに生じたことを意味する。イエスの誕生は、人が子宮の内から外へと移行するという点で、また神的存在が人間になったという点でリミナリティの出来事である。このリミナリティにおいて、旅人と羊飼いが歓待されて、対立や排除を含む社会構造を乗り越えるコムニタスが誕生した。このベツレヘムに生じたコムニタスは、使徒言行録で描かれるあらゆる対立や排除の構造を乗り越えようとするキリスト者の群れの姿を予告している。

本研究は JSPS 科研費15K02425（課題名『新約聖書のなかの差別と共生—ルカによる福音書の「罪人」テキストの社会科学的解釈』）の助成によるものである。なお研究成果の一般公開を企図して、本研究の一部を「すべての人が招かれる教会の予告編」として『福音と世界』（2016年12月）に掲載した。

引用文献

- 浅野淳博, 2016, 「社会科学批評」浅野淳博他編『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局, 97-122.
- 大宮有博, 2004, 「ルカ文書の描く『越境する宣教』」『神学研究』51:31-50.
- 栗林輝夫, 1991, 『荊冠の神学 被差別部落解放とキリスト教』新教出版.
- 本田哲郎, 2006, 『釜ヶ崎と福音 神は貧しく小さくされた者と共に』岩波書店.
- 嶺重淑, 2012, 『ルカ神学の探究』教文館.
- Bailey, Kenneth, 2008, *Jesus through Middle Eastern Eyes: Cultural Studies in the Gospels*, Downers Grove: InterVarsity. (=2010, 森泉弘次訳『中東文化の目で見たイエス』教文館.)
- Chilton, Bruce, 2006, "Recovering Jesus' Mamzerut," James H. Charlesworth ed., *Jesus and Archaeology*, Grand Rapids: Eerdmans.
- Douglas, Mary, 1966, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and*

- Taboo*, New York: Routledge. (=2009, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』筑摩書房.)
- Gennep, Arnold van, 1909, *Les rites de passage: étude systématique des cérémonies*, Paris: Emile Nourry, (=2012, 綾部恒雄, 綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店.)
- Hammel, Gildas, 1990, *Poverty and Charity in Roman Palestine, First Three Centuries C.E.*, Berkeley: The University of California Publications.
- Hezser, Catherine, 2010, "Travel and Mobility," Catherine Hezser ed., *The Oxford Handbook of Jewish Daily Life in Roman Palestine*, Oxford: Oxford University Press, 210-226.
- Jeremias, Joachim, 1962, *Jerusalem zur Zeit Jesu*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. (=1969, Cave, F. H. and C. H. trans., *Jerusalem in the Time of Jesus*, Philadelphia: Fortress.)
- Lenski, Gerhard E., 1966, *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification*, New York: McGraw-Hill.
- Lohfink, Norbert, 1987, *Option for the Poor: The Basic Principle of Liberation Theology in the Light of the Bible*, Berkeley: BIBAL. (=2010, 大宮有博訳『反貧困の神 旧約聖書神学入門』キリスト新聞社.)
- Nolland, John, 1989-1993, *Luke*, 3 vols, Word Biblical Commentary, Nashville: Thomas Nelson.
- Plummer, Alfred, 1922, *Gospel according to St. Luke*, International Critical Commentary, Edinburgh: T&T Clark.
- Safrai, Zeev, 2010, "Agriculture and Farming," Catherine Hezser ed., *The Oxford Handbook of Jewish Daily Life in Roman Palestine*, Oxford: Oxford University Press, 246-263.
- Sanders, E. P., 1992, *Judaism: Practice & Belief 63BCE-66CE*, Philadelphia: Trinity.
- Taylor, John, 2007, *Classics and the Bible: Hospitality and Recognition*, London: Duckworth. (=2014, 土岐健治訳『西洋古典文学と聖書 歓待と承認』教文館.)
- Turner, Victor, 1969, *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*, Chicago: Aldine. (=1976, 富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社.)